

マルコによる福音書 「イエスの肉声を聞く」

司祭 ヨハネ 井田 泉

新約聖書 27 巻の中で、イエス・キリストの生涯を伝えてくれているのは、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四つの福音書です。その中で今回取り上げる「マルコによる福音書」は、一番早く書かれた福音書とされています。また分量は一番短いです。新共同訳聖書の頁数で数えると、前回のマタイが 60 頁であったのに対して、マルコは 38 頁で、マタイの 63 パーセント程度です。

内容からすれば、他の福音書と違ってイエスの降誕物語がありません。イエスの公の活動の直前から始まります。またマルコ福音書のギリシア語写本の古いとされるものには、復活のイエスは直接姿を現しません。

けれどもマルコ福音書にはひとつの重要な特徴があります。それは、イエスが実際に話していたとされるアラム語の言葉が四つ（四箇所）含まれていることです。新約聖書はギリシア語で書かれました。マルコ福音書もそうなのですが、その中にイエスの口から発せられたアラム語が響いている箇所がある。今回はそこにも注目してみたいと思います。

私は聖書のどの書物も愛しますし、あらゆる^{じか}ところから神さまからの命の言葉を聞きたいと願っています。けれどももっとも直に、あるいは間近にイエスとその周りの人々を、その場面を感じたくなってきたときは、マルコ福音書を開きます。たとえば、イエスが 5000 人（男性のみ数えて）の人々にパンと魚を提供する話は四つの福音書のいずれにも出てきます。イエスが群衆をそこに座らせるという場面があります。

マルコ 6:39「そこで、イエスは弟子たちに、皆を組に分けて、青草の上に座らせるようにお命じになった。」

ルカとヨハネは「草」には言及せず、マタイはただ「草」とだけ書いてあります。けれどもマルコだけは「青草」と書いてあります。「青草」の上に人々は腰を下ろす。「青草」というこの一つの言葉で、より具体的にありありとその光景が浮かんでくる気がするのです。

1. 福音の初め

マルコによる福音書はこのように始まります。

「1:1 神の子イエス・キリストの福音の初め。」

ギリシア語原典では、「アルケー」（初め）という単語が冒頭に来ています。

マルコは、神の子イエス・キリストが何をなさったかを伝えたい。イエスの言葉と行動、その生涯が「福音」（人と世界に幸福をもたらすもの）であることを伝えたいのです。

マルコがイエスの降誕物語を知っていたかどうかはわかりません。けれども彼の関心はそこにはなく、人々の前で現実に活動をなさったそのことが大切なのです。それでイエスの公的活

動の直前から彼は語り始めます。

「イエス・キリストの福音の初め」

ここに福音の開始がある。ここに福音の源、原点がある。マルコは、イエスより先に現れた洗礼者ヨハネについて語り、そのヨハネからイエスがヨルダン川で洗礼を受けたことを語ります。洗礼の記事は短いですが重要と思うので読んでおきましょう。

2. イエスの洗礼

「1:9 そのころ、イエスはガリラヤのナザレから来て、ヨルダン川でヨハネから洗礼を受けられた。10 水の中から上がるとすぐ、天が裂けて“霊”が鳩のように御自分に^{くだ}降って来るのを、御覧になった。11 すると、『あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者』という声が、天から聞こえた。」

ヨハネのもとに押し寄せた多くの人々と同じく、イエスが受けた洗礼は川の水の中に全身を浸す洗礼です。ここには古い自分が溺れて死に、神さまと深く結ばれた新しい私が生き始める、という意味があります。

ここで注目したい言葉があります。それは「天が裂けて」と書いてあることです。イエスの洗礼は、マタイ福音書にもルカ福音書にも記されていますが、そこではいずれも「天が開いて」と書かれています。ところがマルコだけは「天が裂けて」と書いてあるのです。「開いて」よりも「裂けて」は激しい、強烈な響きがあります。

これは私の理解なのですが、当時、多くの人々は天が自分たちの上で閉ざされていると感じていたのではないのでしょうか。言い換えると、神の沈黙です。神はおられるとしても天のかなたにおられて、神と自分たちとの間には超えていけない距離、壁がある。神は人と世界の嘆きの現実の前に沈黙しておられる。そのようにはっきりと人々が考えていたとか意識していたとか言うのは乱暴に過ぎますが、自分たちの前に「天が閉ざされている」という悲しみ、嘆きが長く続いてきたのではないか、という気がするのです。神の存在と救いを経験することができなくて、自分たちは放置されているという嘆きです。

旧約聖書・イザヤ書にはこういう嘆きの祈りが記されています。

「63:19 あなたの統治を受けられなくなってから／あなたの^{みな}御名で呼ばれない者となつてから／わたしたちは久しい時を過ごしています。どうか、天を裂いて降^{くだ}ってください。御前^{みまえ}に山々が揺れ動くように。」

長く続いてきた人々嘆きの訴えに答えるかのように、今、イエスの洗礼のときに天が裂かれた。イエスの前に天が裂けたとき、神を求める人々の前にも天は裂けて開かれたはずです。

そのとき「“霊”が鳩のように」降って来て、イエスのうちに入った。「霊」というのは説明しにくいのですが、神の力、神の働き、あるいは力をもって働かれる神ご自身を指す、と理解しておきましょう。それをイエスご自身が見た。さらに天から声が聞こえました。

「1:11 あなたはわたしの愛する子、わたしの心^{かな}に適う者」

神がイエスに呼びかけられたのです。「心に適う」という訳はちょっと固い。砕いて意味を取

れば、「あなたのことがたまらなくうれしい」「愛^{いと}おしくてたまらない」ということです。神のイエスに対する燃えるほどの愛の呼びかけが聞こえたのです。

その後、イエスは荒野にひとり 40 日の間とどまり、サタンから誘惑を受けて、ついにそれに打ち勝たれました。洗礼と、荒野での苦しみという二つのことを経て、イエスはいよいよ公の活動を開始されます。

「1:14 ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を^の宣^のべ伝えて、15 『時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい』と言われた。」

3. シモンのしゅうとめのいやし

さて舞台はガリラヤ湖北岸の町、カファルナウムです。イエスはその町の土曜日の会堂礼拝に弟子たちとともに出席し、説教した後、弟子のひとりシモンの家に行かれました。シモンとは後にペテロと呼ばれ、イエスの弟子の筆頭格となる人です。兄弟はアンデレ。他にヤコブとヨハネの兄弟も一緒に行きました。シモン（ペテロ）は結婚していて、その妻の母（しゅうとめ）が熱を出して寝ていました。

ここで大胆に推理をしてみます。なぜシモンのしゅうとめは熱を出して寝ていたのか。なぜ具合が悪かったのか。聖書本文には何も書いていないので、勝手な解釈なのですが、その原因は婿のシモンに、ひいてはイエスにあったのではないかと、というのが私の想像です。

自分の大事な娘を彼女はシモンと結婚させた。夫はもう亡くなっていたのかもしれませんが。シモンはガリラヤ湖の漁師で、働き者で熱血漢。行動力もあり指導力もあって、安心して娘をまかせられると思っていたのです。ところがその婿のシモンは、しばらく前からイエスという人を信奉するようになり、海の仕事も放り出して、イエスについて回るようになってしまった。イエスはと言うと、どこかでちゃんと学問したわけでもなく、社会的地位があるわけでもなく、言わば放浪の説教者です。カファルナウムの会堂礼拝の説教を頼まれるくらいですから、会堂の責任者からは信頼は得ているようなのですが、心配なのは娘の将来です。婿がイエスについて行ってろくに仕事もしなくなってしまった。一体この先はどうなるのか。

本来なら自分も今日は土曜日の礼拝に行くはずなのですが、気持ちも苦しく体調も悪く、熱を出して寝ていました。昼を過ぎて婿のシモンが帰ってきた。しかもそのイエスを連れて来た。会いたくない、と言う間もなく、イエスのほうが寝ている彼女の部屋にやってきます。

「1:29 すぐに、一行は会堂を出て、シモンとアンデレの家に行った。ヤコブとヨハネも一緒であった。30 シモンのしゅうとめが熱を出して寝ていたので、人々は早速、彼女のことをイエスに話した。31 イエスがそばに行き、手を取って起こされると、熱は去り、彼女は一同をもてなした。」

大きな転換が起きました。しゅうとめの熱は下がり、元気を回復して、イエスと弟子たちをもてなすのです。心配といらだちの原因であったイエスを、今は彼女は歓迎します。

何があってそうなったか。直接イエスと出会ったことです。具体的には、イエスは「彼女の

そばに行き、手を取って起こ」した。

イエスの手が彼女の手を握り、彼女を起こす。イエスの手の動き、働きを想像してみたい。イエスの手を通して、イエスの愛と力と慰めが彼女の中に入ってきて、彼女を起き上がらせた。そのとき、彼女はただ体調が回復したというだけではなく、深くイエスを信頼し、この人のためならできることは何でもしようという気持ちになったのではないのでしょうか。

「31 イエスがそばに行き、手を取って起こされると、熱は去り、彼女は一同をもてなした。」

「もてなした」と訳されているのですが、これは単にお茶やお菓子、食事を出して接待するというだけの意味ではなく、心をこめて奉仕する、協力する、という意味です。このときから彼女は、娘婿シモンと共にイエスの弟子になった。現実には、イエスの活動のために自分の家を提供するようになりました。続きにこう記されています。

「1:32 夕方になって日が沈むと、人々は、病人や悪霊に取りつかれた者を皆、イエスのもとに連れて来た。33 町中の人々が、戸口に集まった。34 イエスは、いろいろな病気にかかっている大勢の人たちをいやし、また、多くの悪霊を追い出して、悪霊にものを言うことをお許しにならなかった。悪霊はイエスを知っていたからである。」

シモン（ペテロ）の家、そのしゅうとめの家は、こうしてガリラヤのカファルナウムの町でのイエスの働きの大事な拠点となりました。

少し進んで3章では、イエスは十二人を任命します。

「3:14 そこで、十二人を任命し、使徒と名付けられた。彼らを自分のそばに置くため、また、派遣して宣教させ、15 悪霊を追い出す権能を持たせるためであった。こうして十二人を任命された。シモンにはペトロという名を付けられた。」

ここにイエスが、シモンにペトロ（ペテロ。「岩」の意味）という名前を付けたことが記されています。

4. タリタ・クム——少女よ、起きなさい

そろそろイエスのアラム語の声が聞こえる箇所に進みましょう。イエスがガリラヤ湖を渡ってカファルナウムに戻ってこられたとき、会堂長のひとりでヤイロという人が来て、イエスを見るとその足もとにひれ伏して懇願しました。

「5:23 わたしの幼い娘が死にそうです。どうか、おいでになって手を置いてやってください。そうすれば、娘は助かり、生きるでしょう。」

イエスさまに来てほしい。手を置いて祈ってやってほしいのです。それしかもう助かる可能性はない。そこでイエスはヤイロと一緒に出かけに行かれました。

道の途中で一つの事件がありました。これも非常に大事な、印象深い話なのですが、今は省略します。ヤイロからすれば、一刻も早く家に来てほしい。そこに会堂長ヤイロの家から使いの人々が来て言いました。

「5:35 イエスがまだ話しておられるときに、会堂長の家から人々が来て言った。『お嬢さん

は亡くなりました。もう、先生を煩わすには及ばないでしょう。』36 イエスはその話をそばで聞いて、『恐れることはない。ただ信じなさい』と会堂長に言われた。37 そして、ペトロ、ヤコブ、またヤコブの兄弟ヨハネのほかは、だれもついて来ることをお許しにならなかった。38 一行は会堂長の家に着いた。イエスは人々が大声で泣きわめいて騒いでいるのを見て、39 家の中に入り、人々に言われた。『なぜ、泣き騒ぐのか。子供は死んだのではない。眠っているのだ。』40 人々はイエスをあざ笑った。しかし、イエスは皆を外に出し、子供の両親と三人の弟子だけを連れて、子供のいる所へ入って行かれた。41 そして、子供の手を取って、『**タリタ、クム**』と言われた。これは、『少女よ、わたしはあなたに言う。起きなさい』という意味である。42 少女はすぐに起き上がって、歩きだした。もう十二歳になっていたからである。それを見るや、人々は驚きのあまり我を忘れた。」

「お嬢さんは亡くなりました」という知らせが来たときに、イエスのうちに断乎たる決意が起こります。絶対にその子を生かす。

死んだ者が生き返るはずがない。そんな奇跡は信じられない——というような疑問は当然ありえますが、しかしそこにとどまったのでは聖書の世界に深入りすることはできません。あり得る、あり得ない、をいったん棚上げして、物語の中に入り込んでいきたいのです。

「36 イエスはその話をそばで聞いて、『恐れることはない。ただ信じなさい』と会堂長に言われた。」

ここからイエスの決意が行動となって進展します。主語はイエス、行動の主体はイエスです。イエスは、弟子たちのうちペトロ（ペテロ）、ヤコブ、またヤコブの兄弟ヨハネの3人だけを連れて行きます。今、この3人こそが、イエスに従う覚悟のできている弟子だったのでしょう。イエスは家の中に入り、人々が泣き叫び、あるいはあざ笑う中を、さらに少女のいる部屋に入って行かれます。

「40 人々はイエスをあざ笑った。しかし、イエスは皆を外に出し、子供の両親と三人の弟子だけを連れて、子供のいる所へ入って行かれた。」

なぜイエスは皆を外に出してしまうのか。それは、本気でこの少女が生きることを願う人だけと一緒に祈らなければならないからです。イエスと、少女の母親と父親ヤイロ、それに3人の弟子たちだけが、少女の部屋に入ります。イエスは手を伸ばして少女の手を取ります。あのシモンのしゅうとめと同じです。そしてイエスは少女に呼びかけます。

タリタ クーム

Ταλιθα κουμ

少女よ 起きなさい

ここにアラム語が出て来ました。ギリシア文字で書いてありますが、アラム語の音をギリシア文字で表記したものです。

「42 少女はすぐに起き上がって、歩きだした。」

イエスの呼びかけは人を死から命へと呼び出すのです。

ところでだれがこの「タリタ、クム」を聞いたのか。そこにいたのは娘とその両親、それに3人の弟子たち。6名のだれかが、このイエスの肉声を強く記憶して、それがマルコ福音書記者に伝えられて、ここに記録された。逆に言えば、ここに文字化された「タリタ、クム」から、私たちはイエスの肉声を聞きたいのです。動けなくなった人、苦しくて息ができなくなった人——そのような人はだれか。だれか思い当たる人があるかもしれないし、私自身かもしれません。

イエスが、その呼びかけを必要としている人に、また私に呼びかけてほしい。息を吹き返させてほしい。

福音書を読む際に大事なことのひとつは、主語がだれかをはっきり意識することです。この物語の後半は徹底的にイエスが主語です。イエスが主語であり、決意と行動の主体です。このことをあいまいにすると、私たちは聖書を教訓集にしてしまう。

「弱った人に呼びかけることが大事なのだ」と、ここから受けとめるのもよい。しかしその前に、あの少女とそのそばの6人と一緒に、イエスが発する声、「タリタ・クム」を聞く。その声、その印象が私の中に刻まれることに意味があります。

ところで、「タリタ・クム」を聞いた少女は「**起き上がって、歩きだし**」ました。今度は主語は少女であり、主体は少女です。

私の聖書の理解のひとつをここから申しますと、神の主体性、イエスの主体性が人に働きかけて、人の主体性を呼び起こす。イエスの働きかけと出会って、私の主体性が喚起される。

この「タリタ・クム」を歌った聖歌 529（おまえはわたしの愛するむすめ）があります。

5. エッフアタ——開け

イエスのアラム語が聞こえる第2の箇所を読みましょう。

「7:31 それからまた、イエスはティルススの地方を去り、シドンを経てデカポリス地方を通り抜け、ガリラヤ湖へやって来られた。32 人々は耳が聞こえず舌の回らない人を連れて来て、その上に手を置いてくださるようにと願った。33 そこで、イエスはこの人だけを群衆の中から連れ出し、指をその両耳に差し入れ、それから唾をつけてその舌に触れられた。34 そして、天を仰いで深く息をつき、その人に向かって、『エッフアタ』と言われた。これは、『開け』という意味である。35 すると、たちまち耳が開き、舌のもつれが解け、はっきり話すことができるようになった。」

イエスに手を置いてほしいというのは、あの少女の父ヤイロと同じ願いですね。

「イエスはこの人だけを群衆の中から連れ出」されました。大勢の群衆の一員ではなく、イエスと一対一となった。イエスの関心はこの人に注がれ、イエスの祈りと情熱はこの人に注がれます。耳が聞こえず、舌が回らないこの人。肉体の障害とともに、人とのコミュニケーションが著しく困難な中で生きて来ざるをえなかったこの人のうめきが、イエスに伝わります。この人の言葉にならないうめきはイエスのうめきになる。

「34 そして、(イエスは) 天を仰いで深く息をつき」と書かれているのですが、「深く息をつき」と訳された言葉(ステナゾー)は「深く嘆息する」「うめく」という意味です。この人のう

めきはイエスのうめきとなって、そのうめきは天に達する。天を仰いでうめくイエスのうめきは、神に届くはずです。そしてイエスは目の前のその人に向かって言われる。「エッフアタ！」（開け！）。

エッフアタ
Εφφαθα

これがアラム語です。この人の閉じられた耳、閉じられた口。この人の思いと言葉を長年にわたって封じてきたものが溶けて、砕かれてほしい。言葉と思いが人と通い合い、神と通い合うものとなってほしい。「エッフアタ！」（開け！）

「35 すると、たちまち耳が開き、舌のもつれが解け、はっきり話すことができるようになった。」

この人の人生を長い間封じ込めてきたもの。そのつらさと苦しさと、呻きを感じとりたい。そしてイエスがうめきつつ、この人の閉じられたもの、封じられたものを開くために全力を注いで叫ばれた「エッフアタ！」（開け！）を私たちも聞き取りたい。イエスは私たちを閉ざし封じている何かを見て、私たちのためにもうめいて、「エッフアタ！」叫んでくださるに違いありません。

6. アッパ——父よ、この杯を取りのけてください

時間的制約から、マルコ福音書に記されたイエスの生涯を大きくたどる余裕がありません。それは皆さまが直接聖書を手にとって、それぞれになさっていただければと思います。

第3のアラム語の出てくる箇所へと急ぎます。イエスのおよそ33年と言われる生涯の終わり。イエスは弟子たちとともに最後の食卓を囲まれたあと、エルサレムの東北、オリーブ山のゲッセマネに行き、そこで苦しみもだえつつ、地面にひれ伏して祈られました。

「14:36 こう言われた。『**アッパ**、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心みこころにかな適うことが行われますように。』」

ここでイエスは神を「アッパ」と呼ばれました。これがアラム語です。

アッパ
Αββα

これは子どもが父親を親しみをこめて呼ぶ言葉です。今の日本語なら一番近いのは「パパ」でしょうか。私の子どもの頃は「お父ちゃん」と呼んでいました。韓国語では「アッパ 아빠」と言いますが、これが非常に響きが似ています。改まった、かしこまった表現ではなく、親しみをこめた表現でイエスは神と呼ばれた。おそらくイエスはこれまでずっと、そのように神に呼びかけて祈ってこられたのでしょう。

私たちは教会の礼拝その他で、「主の祈り」という祈りをしばしば用いて祈ります。その冒頭呼びかけは「天におられるわたしたちの父よ」です。これはどうにもしようがないのですが、神をもっと親しい存在として呼びかけるようにしたいという気がします。

「36 この杯をわたしから取りのけてください。」

イエスの前に差し出されている杯とは死の杯、毒の杯です。ここは聖書に直接書かれていない私の理解になるのですが、イエスがそれを前して苦しんでおられるその杯には、人間の吐き

だした一切のきたないもの、毒が満ちているのです。このゲッセマネにおいて苦しみ祈られた末、イエスはそれを飲み干すことを決意されます。それは具体的には、十字架に死ぬことを意味します。イエスは人間が飲むべき毒の杯を人間に代わって引き受けて飲み、私たちのためには祝福の杯、救いの杯、命の杯を用意してくださいました。これはマルコ福音書の範囲を超えてしまうのですが、私たちが毎週の聖餐式という礼拝の中で味わうものです。

イエスはゲッセマネで逮捕され、弟子たちは皆逃げ去りました。ペテロはイエスが連れて行かれた大祭司の館の庭に入り、そこの僕たちにまじって火にあたっていたのですが、見とがめられて「お前はイエスの仲間だろうと」と言われて 3 度否定します。ペテロは弟子たちの中の筆頭格として、他の弟子がイエスを裏切っても自分は裏切らない決意だったのですが、もろくもそれを 3 度も裏切る結果となり、外に出て泣くしかありませんでした。

イエスは十字架の上で「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」(15:34) と叫ばれました。

これが四つ目のアラム語です。

エロイ エロイ レマ サバクタニ

Ελωι ελωι λεμα σαβαχθανι

前回のマタイ福音書では「エリ、エリ」だったのですが、マルコでは「エロイ、エロイ」です。「エリ」がヘブライ語で、「エロイ」はアラム語だと言われます。この十字架上の叫びの意味については前回少し申しましたので、今回は触れません。

イエスの十字架の死が金曜日、安息日の土曜日を経て、日曜日の朝早く、女の人たちがイエスの墓に行きます。イエスの ^{よご}汚れた遺体をせめてきれいにしてあげたかったのです。ところが墓の中にはイエスの遺体はなく、白い長い衣を着た若者に出会います。若者はこう言います。

「16:6 驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。お納めした場所である。7 さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる』と。」

その若者とは天使でしょうか。なぜ彼はわざわざ「弟子たちとペトロに」と言ったのでしょうか。裏切り、挫折、自責の思いに今もっとも苦しんでいるのはペテロです。そのペテロに対するイエスの愛が、この天使の言葉の中に込められているのではないのでしょうか。

ペテロは大祭司の館の外に出て、自分の弱さと裏切りの自責に泣いていました。しかしそれでよかったのです。彼を新しく立ち直らせるのは自分ではなく、復活のイエスです。自分で自分の人生に勝手に決着をつけてはなりません。復活のイエスがペテロを、そして他の弟子たちを新しく生かします。マルコ福音書はその将来をかいまみせながら終わります。復活のイエスと弟子たちの決定的な出会いは、ルカ福音書とヨハネ福音書のお話の際にとっておきたいと思えます。